松蔭 校長室だより

2024年 12月 2日 発行

―校長から保護者の皆様へのメッセージですー

松蔭中学校・松蔭高等学校

校長 浅井宣光

そして、イエスはたとえを話された。「だれも、新しい服から布切れを破り取って、古い服に継ぎを当てたりはしない。そんなことをすれば、新しい服も破れるし、新しい服から取った継ぎ切れも古いものには合わないだろう。また、だれも、新しいぶどう酒を古い革袋に入れたりはしない。そんなことをすれば、新しいぶどう酒は革袋を破って流れ出し、革袋もだめになる。 新しいぶどう酒は、新しい革袋に入れねばならない。」 （ルカによる福音書 5：36～38）

「年内入試」と多様な総合型選抜

文科省によると、年内に合否が決定する「年内入試」を利用して受験、入学する大学生数は年々増加しており、私立大では約 60%を超えているとのことです。総合型選抜（旧 AO 入試）や学校推薦型選抜（公募推薦、指定校推薦）を利用する入試ですが、本校の場合、例年 40～50 名程の生徒が指定校推薦枠や立教大学への提携校推薦制度を利用するほか、併設大学への内部進学試験も年内に行われますので、他校と比べて「年内入試」による大学進学者の割合が高くなっています。

そのなかでも特に総合型選抜が注目されています。総合型選抜は、学部・学科で学びたい理由と意欲について述べる「志望理由書」を提出し、面接や小論文試験により選抜される入試です。先日の新聞紙面に、各大学の入試担当者へのアンケート調査の結果が掲載されていました。記事によると、「年内入試」により入学した学生の入学後の状況について、総合型選抜を利用した入学者にはリーダーシップや主体性が高いことが認められる、ということでした。大学と本校の連携教育（高大連携）を推進するなかで大学の先生方と意見交換をしたことがありますが、大学側からみて入学してもらいたいのは、「ゼミでリーダーシップを発揮し、中心的な役割を果たすことができるような学生」と話されていたことを思い出し納得したものでした。

総合型選抜の選考手続きにも様々な形態が導入されています。筑波大学情報学群の推薦入試は「ビブリオバトル入試」です。ビブリオバトルは、参加者がお勧め図書を持ち寄って順番にその本の魅力を紹介し、全員でディスカッションしたあと、各自が一番読みたくなった本に投票して「チャンプ本」を決めるコミュニケーションゲームです。入試にビブリオバトルを採用した理由について大学側関係者は、「制限時間内に本の魅力を伝えるには、表現力、説得力、論理的思考力、コミュニケーション力など幅広いスキルが求められます。入学後の学びとの親和性も高く、知識情報・図書館学類のアドミッションポリシーに合致する学生を選抜する方法として最適だと考えました」と説明しています。

近畿大学経済学部の「起業志望型の総合型選抜」もユニークです。募集する受験生として、大学在学中の起業を強く志望し、高校時代にビジネスコンテストなどの受賞経験や起業経験を持つ人物としています。志願者から提出されたプレゼンテーション動画のほか、事業・活動計画に関するプレゼンと口頭試問で合否が決まります。

お茶の水女子大学は、総合型選抜を「新フンボルト入試」と名付けました。名称は近代大学制度の出発点とされるドイツのベルリン大学創設者、ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの名前に由来しているそうです。入試では全員が事前レポートを提出したうえで、文系学科志望者には学内図書館の図書を自由に参照して課題レポートを作成する「図書館入試」を課します。理系志望者は「実験室入試」を行い、それぞれの学科で自主研究のプレゼンやポスター発表面接・口頭試問などの課題が与えられます。担当者は「知的好奇心を持ち、自分の頭で考える力を持っている学生」に入学してもらいたいと説明しています。近年の総合型選抜は大変多様化していますので、高校側としても、適切に対応、指導できる態勢を整え、生徒の選択肢を広げる責任があります。

余談ですが、本校の中学入試方式のひとつに「課題図書プレゼン入試」を 2 年前から導入しました。「図書入試」

ですが「バトル」はせず、課題図書のなかから１冊選んでその内容をプレゼンし、その後の質疑応答を含めて総合的に合否を判定する「一風変わった」中学入試です。選んだ本の魅力や面白さについて自分の言葉でプレゼンし、質疑応答にも適切に対応する能力の有無により判定します。入学後も図書館を知の拠点として活用し、自分で考えて判断し、行動する人の基盤となる力を持っているかどうかを重視します。大学入試と比較すれば知識、語彙量、論理構成力や表現力など稚拙な面があることは当然ですが、方向性は同じではないかと思います。

「銀行型教育」からの脱皮　「言語探究」授業の取り組みから

ブラジルの教育思想家パウロ・フレイレは、教室で教師が教え、生徒は与えられる知識を預金のように貯め込んでいくスタイルの教育を「銀行型教育」と呼びました。20 世紀半ばのブラジルで貧困層の識字教育に携わった経験にもとづく批判的表現です。教師から生徒への一方通行の知識伝達だけでは、生徒はいつまでも受動的な立場を抜け出ることはなく、主体的な学びにつながることはないというのです。知識や技能を暗記し、一問一答式のテストで満点をめざす授業スタイルは「銀行型」の学びです。

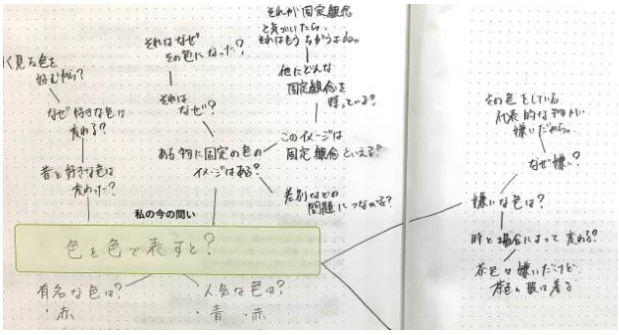
2022 年度より高校課程は新学習指導要領（いわゆる新課程）に移行しました。本校でも現高３生がその１期生ですが、この学年から独自の「言語探究」授業を設定しました。翌 2023 年度高校入学生からは、LS/AA/GL の３コース制を導入し、LS コースでは現高３生と同様に「言語探究」授業を探究型学習の核としました。

探究型学習は、与えられた課題や自らの問題意識にもとづく課題に対して、情報を収集して整理、分析し、結果をまとめて自分の意見をプレゼンテーションするなどして、一人ひとりが主体的に取り組むスタイルの学習です。文献やインターネットを通じた情報収集だけでなく、フィールドワークによって実地観察を行い、校外の様々な人々と接したり、コミュニケーションをはかったりします。また他者と意見交換しながらすすめる協働作業も重視しますので、従来の「銀行型」とは対照的な学びになります。基礎的な知識・技能を身に付ける一方で、「自ら学び自ら考える力の育成」（文部科学省定義）を総合的に図るねらいがあります。

現在、７名の教員をメンバーとする「文理『言語探究』プロジェクト」チームは、現行の「言語探究」授業の総括と今後の高校３ヶ年を通した授業計画（シラバス）を策定する作業を行っています。２学期には、今後の導入を検討中のプログラムに取り組んでみました。この紙面を借りて紹介したいと思います。

高１および高２では、「問いを立てる」作業により、探究的に学び続ける姿勢を育成する「Question X」プログラムに取り組みました。生徒相互が質問することで主体性や積極性を引き出し、自身に対しても問いかけを重ねて思考を深化させ、一連の作業を通じて総合的な探究力を育成します。授業を参観した保護者の方は、「自分の考えをアウトプットするプレゼン能力が問われる入試方式が増えてくるなかで、このプログラムを導入していることは進歩的だと思う」という感想を述べておられました。

「Question X」　相互に「問い」を重ねる（高１）



生徒のメモから　自ら「問い」、思考を深める

高校３年生では「アントレプレナーシップ育成」プログラムを実施しました。計６回の「言語探究」授業で生徒たちは、グループごとにクリスマスカード販売会社を設立します。起業からビジネスプランの作成、ベンチャーキャピタルへの売り込みプレゼン、初期資金と引き換えに株式を売却するなどしてキャッシュフロー管理も体験しました。商品開発と試作品の製作、プロモーション用 CM などマーケティング活動にも取り組み、最終的に販売会を開催し、

財務状況を確認するなどして総括し締め括りました。架空の起業体験とはいえ生徒は皆、ビジネスは自分一人では成り立たない、という事実を実体験したようです。

各教科の授業においても、アクティブラーニングや探究型学習を組み入れた実践が行われつつあります。新しいぶどう酒を新しい革袋に入れるように、教育内容をブラッシュアップさせながら人間力育成を図りたいと思います。

アントレプレナーシップの授業（高３）

オリジナルクリスマスカードを商品化